

ディラン・トマス「パトリシア、エディス、そしてアーノルド」  
(『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of “Patricia, Edith, and Arnold” from Dylan Thomas's  
*Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂 本 正 雄  
SAKAMOTO Masao

2003年10月8日受理

少年は、目に見えない機関車クームドンキン特別号〔訳注：クームドンキンはディラン・トマスの故郷Swanseaにある海際の土地。水飲み場や四阿（あずまや）のあるCwmdonkin Parkはこのすぐ後に出てくる。この公園のことを、ディラン・トマスは“*This sea town was my world . . . And the park itself was a world within the world of the sea town*”と呼んだ〕に乗っていた。車輪は黒光りするまでに磨き上げられ、小さな裏庭をじゃりじゃりと音を立てて進んだ。庭には鳥の食べるパンくずがまかれ、昨日の雪で白くなっていた。煙が寒い午後息のように薄く立ち上った。洗濯ひもの下でポーッと汽笛を鳴らし、洗濯場駅で犬のえさ皿を蹴散らし、吐く蒸気もピストンの動きもだんだんゆっくりとなった。女中は竿を降ろし、揺れているチョッキを抜き取り、両脇の下の茶色の汚れを見せ、それから壁越しに「エディス、エディス、こっちに来て。用があるのよ」と呼んだ。

エディスは壁の向こうでふたつの洗い桶の上ののぼり、呼び返した。「ここよ、パトリシア」。頭が、割れたガラス〔訳注：忍び返し〕の上に動いた。

少年は洗い場から、地下石炭置き場の開いている入り口へと、フライング・ウェルシュマン〔訳注：「フライング・スコットマン」のもじり。こちらはSir Nigel Gresleyによってデザインされた、1923年建造の蒸気機関車。1928年にロンドン～エジンバラ間をノンストップで走り、1934年、時速約160キロを記録した〕をバックさせ、ポケットにあった金槌をブレーキ代わりにぐいと引っ張った。制服の助手たちが燃料を持って走り出てきた。敬礼する機関助手に少年は話しかけた。機関車は、猫よけ用のとげ付き中国壁をまわり、汚水溝のなかにできた、いくすじかの凍り付いた川のそばを通り、石炭貯蔵庫の穴トンネルに入って、また出てきてたどたどしく離れていった。でも少年はずっと、機関車のキーッとかポーッと音を通して聞こえてくる、パトリシアと隣の女中の話に注意して、耳を傾けていた。隣の女中はルイスさん家の女中だった。ふたりは仕事をしなくてはいけない時間におしゃべりをして、少年の母のことをTの奥さんと呼び、Lの奥さんのことは失礼な言葉で話の種にしているのだ。

パトリシアがこう言っているのが聞こえてきた。「Tの奥さん、6時まで帰ってこないわ。」

それから隣のエディスが答えた。「Lのおばあちゃん、ロバートさんを捜しに、ニース〔訳注：ウェールズ、West Glamorgan 州の町〕に行ったわ。」

「ロバートさん、またお楽しみなのね。」パトリシアがささやいた。

「たのん、しみん、ごとん。」少年は石炭貯蔵庫の穴の中から叫んだ。

「顔がまた汚れるでしょ、ただじゃおかないわよ。」パトリシアは話に夢中になったまま言った。

少年が石炭山に登っても止めようとはしなかった。少年はしずかに頂上に立った。石炭山城主だ。頭が天井に触れた。それからふたりの娘たちの気をもむ声に耳を傾けていた。

パトリシアは泣きそうだった。エディスはすすり泣いて、ぐらぐらする洗い桶の上で揺れていた。「石炭のてっぺんにいるんだよ。」少年は言って、パトリシアが怒るのを待っていた。

パトリシアは、「あの人には会いたくないわ、あなたひとりで行ってよ」と言った。

「一緒に行かなきゃだめよ、わたし、知りたいわ」とエディスが言った。

「わたし、知りたくないわ。」

「パトリシア、耐えられないわ。一緒に行かなきゃ。」

「ひとりで行って。あなたを待ってるわよ。」

「パトリシア、お願いだから。」

「石炭の上にうつぶせになったよ。」少年は言った。

「いいえ、今日はあなたが順番の日よ。わたしは知りたくない。わたしは、あの人が愛してくれてるって、思いたいだけなの。」

「パトリシア、お願いだから、ばかなこと言わないで。来るの、来ないの。あの人の言うことをどうしても聞きたいの。」

「それじゃ、30分後に。こっちから呼ぶわ。」

「早く来ないと、知らないよ。とんでもないくらい汚れているよ。」

パトリシアは石炭貯蔵庫まで走った。「なんという口の利き方なの。そこから直ぐに出てらっしゃい。」と言った。

桶がずれはじめ、エディスは消えた。

「あんな口の利き方はもうしないわよね。まあ、服。」パトリシアは少年を中に連れて入った。

パトリシアは目の前で服を着替えさせた。「でないと、お話しはないわよ。」少年はズボンを脱いで、パトリシアのまわりを叫びながら踊った。「ほら、見てよ、パトリシア。」

「お行儀よくしなさい。でないと公園には連れて行かないわよ。」パトリシアは言った。

「じゃあ、公園に行くの。」

「そうよ、みんなで公園に行くの。坊ちゃんとわたしと、それから隣りのエディス。」

少年は、パトリシアに手間をかけさせないよう、ひとりできちんと着替え、髪を分ける前に両手につばを吐きかけた。パトリシアは少年が黙ってきちんとしていることには注意を向けていな

いように見えた。パトリシアの大きな両手は握りあわされて、胸についた白いブローチを見下ろしていた。パトリシアは背が高く、骨太の女だった。手が無骨だった。指は足の指みたいで、肩幅は男みたいに広がった。

「これでいい。」少年は尋ねた。

「むずかしいとこね。」パトリシアは言った。それからいとおしむように少年を見た。パトリシアは少年を抱え上げ、タンスのてっぺんに座らせた。「ほら、同じ背の高さよ。」

「でも、そんなに歳取ってないよ。」

少年は、こんな日の午後にはなにかが起きると知っていた。盆に乗って滑るくらい雪が降ったり、アメリカのおじさんが、アメリカにおじさんはいないのだが、連発銃にセントバーナードをつれてきたり、ファーガソンの店が火事になって、包みがみんな歩道に落ちてきたり。それでパトリシアが黒い直毛の生えた、重たい頭を肩に載せてきて、襟筋にささやきかけても、少年は驚かなかった。「アーノルド、アーノルド・マッシュズ。」

「ほら、ほら。」少年はパトリシアの頭の分け目を指でこすり、パトリシアの背後にある鏡に向かってウインクして、パトリシアの服の背中を見た。

「泣いているの。」

「違うわ。」

「そうだよ。ほくの首筋のところ、冷たいもん。」

パトリシアは袖で眼を拭いた。「わたしが泣いてたって、誰にも言わないのよ。」

「みんなに言うよ、T奥さんにも、L奥さんにも、警察にも、エディスにも、それからパパ、チャップマンさんにも、パトリシアがほくの肩で雌山羊みたいに泣いてたって、二時間も泣いてたって、涙がヤカン一杯になったって。ほんとは言わないよ。」少年は言った。

少年とパトリシアとエディスが公園へと出発すると、直ぐに雪が降ってきた。ぼたん雪が思いがけず、岩の丘に落ちてきた。空は、まだ午後の三時だったが、たそがれみたいに暗くなった。最初の雪片が降ってきた時、家並みの裏手の区画のどこかで、別の少年が叫び声をあげた。スプリングミード校のオッキィ・エバンス先生が、最上階の張り出し窓を開け、まるで雪をつかもうとするかのように、頭と手を差し出した。パトリシアが「さあ、早く戻るのよ。雪が降っているわ。」と言って、少年の足が濡れないうちに、その日はもうやめにしてくれるのを、少年は我慢強く、待っていた。雪はパトリシアの顔を掃くように、黒い帽子に積もりながら激しく降っていたけれど、パトリシアには雪なんか見えていないんだ。少年は丘のてっぺんに来た時に思った。角を曲がって、公園につづく道に入った時、パトリシアの意識をさまさせるのではと思って、少年は声を出せなかった。少年はゆっくり遅れて、帽子を取り、口のなかに雪を受けた。

「帽子をかぶりなさい。」パトリシアが振り返りながら言った。「風邪を引きたいの。」

パトリシアは少年のマフラーを上着の中に押し込み、エディスに聞いた。「雪の中で待ってると思う。きっと待ってる、かしら。雨が降っても晴れてても、わたしが行く水曜日にはいつもいた

わ。」パトリシアの鼻の頭は赤かった。ほほは石炭みたいに燃えていた。パトリシアは夏より、雪の中の方がきりっと美しく見えた。夏には、濡れた額に髪が張り付き、背中には赤い点が広がるのだ。

「きっと待ってるわ。」エディスが言った。「いつだったか、金曜日、土砂降りになったけど、ちゃんといたわ。行くところがないのよ。いつもいるから。かわいそうな、アーノルド。」一部毛皮のついたコートを着て、エディスは白く、こざっぱりとしていた。パトリシアの半分ほどの大きさだった。まるで買い物に行ってるみたいに深い雪の中をずんずん歩いた。

「奇跡は終わらず、と。」少年は大声で自分に言い聞かせた。これが、パトリシアが、ほくに雪の中を歩かせている理由なんだ。これが嵐の中をふたりの大きな女と歩いている理由なんだ。少年は道に座り込んだ。「ほくはそりに乗ってるんだよ。引っ張ってよ。エスキモーみたいにほくを引っ張ってよ、パトリシア。」

「おきなさい。ばか。お家に連れて帰るよ。」

少年にはパトリシアが本気で言ってるのではないことがわかった。「かわいいパトリシア、美しいパトリシア。おけつをずりずり引っ張ってよ。」

「今度、はしたない言葉を言ったら、誰に言いつけるかわかってるでしょ。」

「アーノルド・マシューズだろ。」

パトリシアとエディスは顔を寄せ合った。

「この子、気づいているわ。」パトリシアがささやいた。

エディスが言った。「あんたんちの仕事をやらなくて良かったわ。」

「ああ」パトリシアは少年の手をつかみ、自分の腕に押しつけて、「なにものにも代えられないくらい大事だわ。」と言った。

少年は砂利道を走り、公園の、上の散歩道まで行った。「ほくはきかん坊だぞ。ほくはきかん坊だ。パトリシアがほくを甘やかすんだあ。」

すぐに公園は一面真っ白になるだろう。すでに貯水池と泉のまわりの木々にはじんじんでしまった。エニシダの丘にある訓練校は雲に隠れた。パトリシアとエディスは四阿へとけわしい道を急いだ。少年は立ち入り禁止の芝生の上を歩いて、ついて行って、横を通り抜け、葉を落とした茂みに、そのまま、どんとつっこんだ。茂みの痛さに声をあげたままだったが、けがはしなかった。娘たちはいま悲痛な表情で、話しをしていた。誰もいない四阿でコートを打ち振り、ベンチの上に雪を跳ねかけ、ふたりくっついてしずかに座った。ボーリングクラブの窓のすぐそばだった。

「ちょうど約束の時間よ。」エディスが言った。「雪が降ってて時間通りにつくのは大変だわ。」

「ここで遊んでいい。」

パトリシアがうなずいた。「しずかに遊ぶのよ。雪のなかを暴れ回っちゃだめよ。」

「雪だ、雪だ、雪だ。」少年は言った。それから溝の雪を集めて、小さな球を作った。

「あの、たぶん仕事を見つけたのよ。」

「アーノルドじゃ無理よ。」

「来なかったらどうなるの。」

「きっと来るわよ、パトリシア。そんなこと言わないで。」

「手紙は持ってきた。」

「バッグの中よ。あなたは何通もらった。」

「ううん。エディス、あなたこそ何通もらったの。」

「数えたことないわ。」

「ひとつ見せてよ。」パトリシアがいった。

このころには、少年はふたりのおしゃべりが気にならなくなっていた。あのふたりは年上で、間抜けなんだ。誰もいない四阿に座って、なんでもないことに涙を流して。パトリシアは手紙を読んでいた。唇を動かしていた。

「これ、わたしにも言ったわ。きみはぼくの星だって。」

「『愛しいきみへ』、で始まるの。」

「いつもよ、『愛しいきみへ』。」

エディスは大声を上げ、涙を流し始めた。エディスがベンチで揺れ、雪をかぶった、パトリシアのコートに顔を隠すのを、雪のたまを手を持ったまま、少年はじっと見ていた。

パトリシアは、エディスを軽く叩いてなだめ、自分の顔を揺らしながら、言った。「やってきたら、ちゃんと言ってやるわ。」

誰が来たらっていうんだろう。少年が雪のたまを高く投げ上げると、加速度をつけて音もなく落ちてきた。エディスの泣き声も、音のない公園で口笛のように澄んで、か細かった。見知らぬ人間、太股まである長靴を履いた男、アップランズからやってきた、にたにたした大きい男の子とかが通った時のことを考え、やわな娘たちとは関係ないそぶりで、離れて立ち、テニスコートの金網にもたせかけて、雪を積み、パンをこねているパン屋よろしく、両手をその雪につっこんだ。息を潜め、「紳士淑女のみなさま、これがものごとの摂理というもので」と、少年が言い、雪を掘って、一山のパンにかたどると、エディスが顔を上げ、言った。「パトリシア、あの人のこと、怒らないでよ、約束よ。落ち着いて、仲良くよ。」

「わたしたちふたりに『愛しいきみへ』って書いて。」パトリシアは怒って言った。「あの人、あなたの靴を脱がせて、足の指を引っ張って、それから・・・」

「だめ、だめ、だめよ。言わないで。そんなふうには言っちゃだめ。」エディスは両手の指をほほに持っていった。「そうよ、そうしたわ。」エディスは答えた。

「誰かが、エディスの足指を引っ張ったんだ。」少年はこっそり言った。それから、くっくっと笑って、四阿の反対側をぐるっと走った。「エディスは取り引きしたんだ。」少年は大声で笑った。それから男が、コートも着ずに隅のベンチに座り、手を碗にして息を吹きかけているのを見て、立ち止まった。その男は白いマフラーをして、チェックの帽子をかぶっていた。少年を見ると、帽

子を目深にかぶった。両手は紫で、指の先は黄色だった。

少年はパトリシアのところへと走って戻った。「パトリシア、男の人がいるよ。」大声で叫んだ。  
「どこにいるの。」

「四阿の向こう側だよ。コートも着ないで、こんなふうに手に息を吹きかけていたよ。」

エディスは飛び上がった。「アーノルドだわ。」

「アーノルド・マッシュズ、アーノルド・マッシュズ、そこにいるのはわかっているのよ。」パトリシアは四阿のむこうへと声をかけた。それからしばらくして、その若い男が帽子を上げ、微笑みながら、四阿の角に現れ、木の柱に寄りかかった。

青い、なめらかな生地のスーツのズボンの方は、足先で広がり、肩は高くそびえ、先がとがっていた。先のとがった最新の靴は輝いていた。赤いハンカチが胸のポケットから飛び出していた。雪の中にずっといたわけではないのだ。

「君たちふたりが知り合いだったとはな。」男は大声で言った。赤い眼をしたふたりの娘と、じっと動かず口をぽかんと開けている少年に顔を向けた。少年はパトリシアの横に立っていた。ポケットは雪のたまをいくつも入れ、一杯だった。

パトリシアが顔をふいと上げると、帽子が片方にずり落ちた。帽子をなおしながら、「こっちに来て座りなさいよ、アーノルド・マッシュズ。あなたにはいくつか質問に答えてもらわなくちゃ」と、パトリシアは洗濯をする日の声音で言った。

エディスはパトリシアの腕をぐいとつかんだ。「パトリシア、約束でしょ。」エディスはハンカチの先を指で引っ張った。涙がほほを転がり落ちた。

アーノルドはそれからしずかに言った。「その子に、むこうで遊んでいるように言えよ。」

少年は、いったん四阿の向こうに回り、戻ってくるとエディスが喋っているのが聞こえてきた。「肘のところに穴が空いているわ、アーノルド。」そして男が足下の雪を蹴って、娘たちの頭の後ろの壁にある、いくつものハート形の絵と名前の落書きを見つめているのも見えた。

「水曜日には誰とデートしてたの。」パトリシアが聞いた。色を散らした胸のひだのところ、不格好な手がエディス宛の手紙を握っていた。

「きみだ、パトリシア。」

「金曜日には誰とデートしてたの。」

「エディスとだよ。パトリシア。」

男は少年に言った。「おい、ごろごろ転がして、フットボールくらいの雪のたまを作れるかな。」

「うん、フットボールの球ふたつ合わせたくらいの作れるよ。」

アーノルドはエディスのほうに振り向き、言った。「パトリシア・デイヴィズとはどうやって知り合ったの。きみはプリンミル〔訳注：スワンジーの地名〕で働いてるんだろ。」

「クームドンキンで働きはじめたばかりなのよ。そのあと、言おうにも会わなかったわ。今日言おうと思ってたわ、でも、その前に、わかっちゃったわ。アーノルド、どうして。わたしが休み

の午後はわたしと、水曜日にはパトリシアと。」エディスが言った。

雪のたまはずんぐりした雪男になっていき、汚い頭は片方に傾き、顔には枝が一杯刺さっていた。頭には少年の帽子をかぶり、鉛筆をたばこ代わりにくわえていた。

「君たちを傷つけるつもりはないさ。ふたりとも愛しているよ。」アーノルドが言った。

エディスは金切り声をあげた。少年は前に跳び上がり、背中の壊れた雪男は崩れた。

「うそを言わないで。どうしてふたり一緒に愛せるのよ。」ハンドバッグをアーノルドに向かって振りながら、エディスが大声を上げた。バッグはぱちんと開いた。手紙の束が雪の上に落ちた。

「手紙を拾えるかしら。」パトリシアが言った。

アーノルドは動かなかった。少年は崩れた雪男のなかに鉛筆を探していた。

「選んでよ、アーノルド・マシューズ、ここで今。」

「この人、それともわたし。」エディスが言った。

パトリシアはアーノルドに背を向けた。エディスは、口の開いたバッグをぶら下げて、じっと立っていた。吹き寄せる雪で手紙の最初のページがひっくり返った。

「ふたりともだよ。」アーノルドは言った。「落ち着けよ。ここに座って話そう。そんなに泣くなよ、エディス。男なら女をひとり以上愛するって、いつも本で読んでるだろ。チャンスをくれよ、エディス。ほら、女の子が見ているよ。」

パトリシアは矢の刺さった心臓の絵と名前を見た。エディスは手紙がくるっと巻きあがるのを見た。

「パトリシア、君だよ。」アーノルドは言った。

それでもパトリシアはアーノルドの方を見ないで、立っていた。エディスは声を上げようと口を開けた。するとアーノルドが自分の口に指を当て、内緒話の格好をした。パトリシアに聞こえないくらいこっそり。アーノルドがエディスをなだめ、何か約束をしているのを、少年は見つめていた。でもエディスはまた金切り声を上げ、四阿から走り出して、小径を駆け下りていってしまった。ハンドバッグが脇にぶつかっていた。

「パトリシア」アーノルドは言った。「こっちをお向きよ。ぼくは言わなくちゃいけなかったんだ。君だよ。パトリシア。」

少年は雪だるまの上に身体をかがめ、鉛筆が頭に突き刺さっているのを見つけた。立ち上がった時、パトリシアとアーノルドが手に手を取っているのを見た。

雪がポケットからしたたり落ちていた。雪が靴の中で解けていた。雪が襟を伝い落ち、チョッキの中に入ってきた。「まあ、ご覧なさい。」パトリシアは言って、少年のもとに駆け寄り、両手をとった。「びしょびしょじゃないの。」

「ただの雪じゃないか。」アーノルドが言った。四阿に突然一人きりになっていた。

「ほんとに雪よ。氷みたいに冷たいわ。足がびしょびしょのスポンジみたいだわ。すぐお家に帰りましょ。」

三人は小径を上り、上の散歩道に出た。パトリシアの足跡は積もっていく雪の中に馬の足のよう大きかった。

「ほら、おうちが見えるよ。屋根が白くなってる。」

「すぐに着くわよ。」

「外でアーノルド・マシューズのような雪だるまを作りたいな。」

「黙って、黙って。お母さまがお待ちよ。おうちに帰らなくちゃ。」

「待ってなんかないよ。ロバートさんとお楽しみに出かけたんだよ。たのん、しみん、ごん。」

「パートリッジの奥さまとお買い物にいらしたのはよく知っているでしょ。妙な嘘をつくもんじゃないわよ。」

「ああ、アーノルド・マシューズは嘘をついたんだよ。エディスよりもパトリシアの方が好きだって言って、そのあとこっそりエディスに囁いていたんだ。」

「嘘なんかついちゃいないよ、パトリシア。エディスのことは全然愛しちゃいない。」

パトリシアは歩みを止めた。「エディスを愛していないって。」

「うん、言ったろ、君だって。エディスのことは愛していないんだ。」アーノルドは言った。「おい、おい、信じないのかい。パトリシア、君だよ。エディスなんか何でもない。単に、会ってただけなんだ。いつも公園にいたからだよ。」

「でもあなた、エディスに愛しているって言ったんでしょ。」

少年はふたりの若者の間でとまどい立っていた。パトリシアはどうしてあんなに怒って、真剣なんだろう。顔は真っ赤になり、両の眼が輝いていた。胸が上下に動いていた。ストッキングの破れ目から黒く長い足の毛がのぞいていた。パトリシアの足は、ぼくのおなかぐらいあるや、と少年は思った。寒い。お茶が欲しいよ。ズボンのチャックのところに雪が入っているや。

アーノルドはゆっくり、小径を後ずさりした。「そういわなくちゃならなかったんだ。でないとなの子、帰らなかったんだよ。仕方なかったんだ、パトリシア。あの子の格好、見ただろ。大嫌いだよ。嘘だったら、針千本飲んでもいいよ。」

「バン、バン。」少年は叫んだ。

パトリシアはアーノルドをぱしっと打っていた。男のマフラーを引っぱって、肘で殴っていた。げんこつで殴りながら、小径を追いかけた。それから声を限りに、「エディスに嘘をつく、つき方を教えてやろうじゃないの。このブタ野郎。腹黒野郎。エディスに悲しい思いをさせる、そのやり方を教えてやろうじゃないの。」

アーノルドはよろよろしながら後ずさりし、殴られまいと顔を覆っていた。「パトリシア、パトリシア、殴らないでおくれ。人が見ているだろ。」

アーノルドが転んだ時、傘をさした女のふたり連れが、灌木の向こうから、降りしきる雪越しにじっと見ていた。



ディラン・トマス「パトリシア、エディス、そしてアーノルド」(『若き日の芸術犬の肖像』から)

パトリシアはアーノルドの上にそびえていた。「おまえ、エディスに嘘をつき、私にも嘘をついた。」パトリシアは言った。「立て、アーノルド・マシューズ。」

アーノルドは立ち上がった。それからマフラーをなおし、赤いハンカチで両目をふき、帽子を上げ、四阿の方に歩いていった。

「それから、あんたら。」パトリシアはじっと見ている女たちに向かい、「恥を知れ、女ふたり、雪の中でじゃれ合って。」

ふたりは灌木の後ろにひょいと隠れた。

パトリシアと少年は手に手を取って、上の散歩道へとまた上っていった。

「ほく、帽子を雪だるまのところにおいて来ちゃったよ。」少年は思い出して言った。「トッテナムの色リボン〔訳注：1882年結成のサッカーチームTottenham Hotspurのこと〕のついた帽子なんだ。」

「すぐ走って取っ取っおいで、それ以上濡れやしないだろうから。」パトリシアは言った。

少年は帽子が雪に半分隠れているのを見つけた。四阿の隅では、エディスが落としていった手紙をアーノルドが、濡れた便せんをゆっくりめくりながら、読んでいた。少年のことは目に入っていなかった。少年は柱の陰にいて、アーノルドに気付かれなかった。アーノルドは手紙を全部、丁寧に読んだ。

「帽子を探すのにずいぶん時間がかかったね。」パトリシアが言った。「あの男、まだいた。」

「ううん、いなかった。」少年は言った

家に帰り着くと、パトリシアは暖かい居間で、服をまた着替えさせた。少年は両手を暖炉の前に差し出した。ももなく、両手が痛みはじめた。

「手に火がついているよ。足の指先も、顔も。」

少年をなだめたあとで、パトリシアが言った。「ほら、ずっといいでしょう。痛くなくなったでしょ。すぐに弱虫じゃなくなるわ。」パトリシアは部屋の中を忙しく働き回っていた。「さて、今日は、みんな、たくさん、泣いちゃったね。」